郷土ちがさき

第140号
発行　平成29年9月1日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会長　平野文明
編集責任　平野文明

郷土史の先達　鶴田栄太郎さん　源　邦章　……1
第六十二回大岡越前祭　羽切信夫　……4
神武天皇の瞻望（せんぼう＝国見）　平野文明……7
史跡めぐり報告　山本俊雄・源　邦章……12
会員投稿　神輿道　中島幸子……16

郷土史の先達　鶴田栄太郎さん

源　邦章

一、はじめに

昨年の三月、当市下寺尾にあります「下寺尾官衙遺跡群」が国の史跡に指定されたことは、皆さまもご存じのことと思います。

これに先立ち同所に「七堂伽藍跡の碑」が建碑されております。これが今年の十二月で建碑六十周年になります。市教育委員会が中心になって様々な行事が計画されているようです。この「七堂伽藍跡の碑」建碑の中心人物が、茅ヶ崎郷土史の先達であり郷土会設立者の一人であります鶴田栄太郎さんです。

鶴田栄太郎さんは明治二十一年（一八八八）に父久吉、母ヨフの長男として茅ヶ崎の円蔵に生まれました。明治三十五年（十四歳）から同三十九年までの五年間に二十一冊に及ぶ自筆の日記を残しています。それによりますと、文中には郷土の行事の記録や近隣史蹟の見聞記等が多く、幼少の頃より郷土に対する愛着があったことが窺えます。

大正二年（一九一三）から横浜に在住、昭和七年（四十四歳）に史跡めぐり同好会に加入し、会誌の編集などを引き受けこの同好会の史跡めぐりに参加する中で、石野瑛・八幡義生氏を始めとする神奈川県内の地方史研究者たちと親しく交わり、郷土史研究者として成長していきました。

二、『相武研究』第十年八號「相模茅ヶ崎史観」（特集号　昭和十六年刊）の発行

同書の目次の一部

「相模茅ヶ崎の史的概観」　石野　瑛　県郷土史編纂会幹事
「宝生寺阿弥陀三尊御像」　八幡義生　日本美術協会員
「小和田の上正寺沿革」　木島　鄰　医師・郷土史研究者
「龍前院の五輪塔」　跡部直治　宝生寺住職・仏教考古学者
「茅ヶ崎の昔を歩く」　鶴田あしかび（栄太郎）本誌編集者

右に記された目次の一部からもわかりますが、本誌は茅ヶ崎の史的研究書としては最初のものであり、その内容の多くは現

在もなお読むに価するものであります。ここに茅ヶ崎への史跡めぐり及び本誌の発行にて茅ヶ崎の郷土史が県下で注目され始めました。その後戦争が激しくなりましたが、鶴田さんは横浜から茅ヶ崎へ戻り、茅ヶ崎地域の史的研究に専念するようになりました。戦時中でも次項に述べますように宝生寺の阿弥陀三尊像の発見、信隆寺鰐口を本堂より庫裏へ避難させた結果戦災から守ったというように、文化財への関心・保護に努めていました。

三、鶴田栄太郎さんの茅ヶ崎への貢献

ご本人直筆にて和田久徳氏（鶴田氏友人・東南アジア史の研究者）宛に書かれたものが『茅ヶ崎市史研究』第十二号の鶴田氏の「茅ヶ崎郷土史研究の回顧」に記載されています。その要旨を記載します。それによっていかに鶴田さんが茅ヶ崎に貢献したかが解ります。

（1）一里塚
復元を当時の町長新田　信に進言、復元させました。

（2）室田八王子神社
社殿が近隣火災に遭遇、消防署に通報して類焼を免れる。

（3）信隆寺鰐口
空襲時、本堂より庫裏へ避難。本堂焼失するも鰐口無事。

（4）龍前院の銅鐘
戦時下鐘供出から免れる運動を一人で行い、守られました。

（5）七堂伽藍跡の碑の建碑
礎石の散逸を防ぎ、市内の郷土史・考古学警鐘の為建立。

（6）懐島の碑建立
市内鎌倉文化の中心地円蔵神明神社内に当該碑を建てる。

（7）宝生寺の阿弥陀三尊像
阿弥陀三尊像の発見と国重要文化財指定に尽力。

（8）鶴嶺参道の整備
朝恵上人の墓（発見は山口氏）のお祭りを計画。句碑・歌碑の整備

（9）大岡祭
発起人の中心。大名行列・火消の纏行列・木遣囃子行列を発案。

（10）県内史跡めぐり
横浜在住時、史跡めぐりに参加。すぐに中心となる。茅ヶ崎地域でも、前記した『相武研究』十年八号の発行のため、茅ヶ崎地域での史跡めぐりを企画、積極的に行った。

（11）同窓会・運動会
茅ヶ崎地域での鶴嶺小学校同窓会・同窓会誌の発行・運動会での卒業生の仮装行列や模擬店を開催。

（12）夏服の販売
関東大震災後、茅ヶ崎の女生徒全員に木綿ギンガムの夏服を市価の三分の一の値段で販売。

（13）校歌作成支援
鶴小、鶴中、松小、梅小などが校歌作成の際には、作詞者に郷土の特色を話して参考意見を進言。

（14）その他
下寺尾・香川の貝塚、行谷敷石住居址などの発見、円蔵祭囃子保存会の結成など。

以上が鶴田さんが書かれた記録ですが、この他にも浜降祭の県の無形文化財指定の推進者であり、さらに河童徳利伝説を広め、市民が口碑伝説に関心を持つようにするなど、鶴田さんの

活動は広範囲に及んでおり、茅ヶ崎市内の文化財に鶴田さんの息のかからないものはないと言われています。

四、市内に残る碑（いしぶみ）

茅ヶ崎市内には鶴田栄太郎さんに関する碑が三つと鶴田さんが主唱し或は撰文した碑が七つほどあります。

（1）浄見寺墓地内歌碑

「浄見寺　春めぐり来て　蘇える　史蹟の墓に　大き公孫樹よ」

（2）円蔵山王社前の句碑

「春や春　岐路に立てども　和合神」

（3）高田守屋氏宅内の「頌徳碑」鶴田栄太郎さんを偲ぶ

「鶴田栄太郎氏は明治廿一年三月隣邑円蔵に生る　資性俊敏篤実常に名利を棄て清風に甘んずるの風あり専ら郷土史研究に身を捧ぐることを世余年相武の山谷君の足跡至ざるなく以て地方文化の向上に寄与するところ大なり　君偶々大山街道沿線を踏査するや守屋氏の祖に歌人に兵衛兼布のあるを見出し之を世に紹介する君のこの挙は守屋氏の深く感動するところなり　ついに守屋氏は君の為に建碑の企をなす　蓋君が芳志の現なり　而て建碑の地をこの山王山に相したる所以はこの地が曽ってわが高田の山王社の鎮座せし所にして君が兼布の辞世の上の句に擬えて詠める

（葭芦を　みな刈り棄し高田野に　今は黄金の　穂波打つ）

の歌に縁り深き高田耕地を一望の中に収め得る所　加え兼布の墓碑近き所になるによる今碑の傍らに立ちて南の方眼下に展望さるる高田耕地は水越梅二氏久保田隆蔵氏等わが郷党の人々が農地の整理と改善に渾身の力を注ぎて近郷稀にみる美田と古今につながる美しき情景はこの碑の永遠に物語るところ　守屋氏建碑の志亦茲にあるなり」

森　要之助撰　水越　茅邨書

昭和廿八年八月　守屋　萬蔵建之

（4）鶴田さん関連の碑

①	大山古道吟行句碑	長福寺	主唱者　鶴田栄太郎
②	新田信姥島句碑	熊野神社	撰文　鶴田栄太郎
③	朝恵上人の碑	鶴嶺参道	撰文　鶴田栄太郎
④	鴫立庵芳如句碑	長福寺	撰文　鶴田栄太郎・小生夢坊
⑤	円蔵神明大神宮の碑	神明大神	撰文　鶴田栄太郎
⑥	杉崎鳥花と唖然坊句碑	赤羽根墓地	撰文　鶴田栄太郎
⑦	河童徳利の碑	輪光寺	撰文　鶴田栄太郎

五、茅ヶ崎郷土会との関わり

「茅ヶ崎郷土会は私の私党？であったのです。」と鶴田さんは「茅ヶ崎郷土史研究の回顧」でのべております。また『郷土ちがさき』第四十四号より十九回に渡って連載された川添隆行氏の「茅ヶ崎郷土史の研究者達」（九回からは「茅ヶ崎郷土会前史に表題を変更）には、『郷土茅ヶ崎』全六巻の主要執筆者の一人、鶴田栄太郎さんが「砂丘」「八松ヶ原」「鶴嶺八幡宮」「龍前院の銅鍾」「鰐口と多宝塔（今宿信隆寺）」「景能館跡」を書かれていることが記載されています。また同書で川添氏は郷土会を興した指導者として斎藤昌三・鶴田栄太郎・重田景次・熊沢亥三・藤間善一郎・三沢善右衛門・塩川健寿・山口金次であると鶴田さんを評価しています。昭和二十三年四月に鶴田さんが『茅ヶ崎の面影』を発刊。戦前から市内の古土器等の発掘を盛んに行い、市内考古学の第一人者と自他共に許している

と書いています。昭和十六年六月一日、雑誌『相武研究』（石野瑛主幹）が臨時号として「相模茅ヶ崎史観」を発行したと記載しています（詳細は前述）。また郷土会創立者の一人斎藤昌三氏が死去した当時、郷土会の常連十六名の中に鶴田さんの名前が見られます。

六、おわりに

鶴田栄太郎さんは少年時代から郷土史に関心が高かった事は前述しました通りですが、同時に短歌・俳句にもいそしみ自分の雅号「あしかび」であらゆる機会に短歌・俳句を作り、市内にも二基の短歌・句碑が建っています。奥さまの桃世さんも歌人として知られているとのことです。

同時代の郷土史家に斎藤昌三氏がいます。茅ヶ崎郷土史界の双璧でありますが、斎藤氏は多彩な趣味の持ち主で郷土史はもちろん蔵書票の収集や性風俗・民俗学的な性神まで行っていましたが、鶴田さんは郷土史研究や史跡めぐりに没頭した人生を送った人でした。そしてついに鶴田さんは昭和四十三年（一九六八）十月、八十歳で亡くなられました。その最後は当時の老人センター豊寿荘で郷土史の講演が終わり「これで今日の講座を終わります」と言い終えるや隣りの人に倒れ掛かって絶命したとのことです。

鶴田さんの諸方面に及ぶ郷土史研究の影響は大変大きく、鶴田さんの活動に刺激されて郷土史研究に入って行った人たちは多勢いるとのことです。

参考図書

①『相武研究』十年八号（相模茅ヶ崎史観）　神奈川県郷土研究聯盟
②『郷土茅ヶ崎』上・下巻　茅ヶ崎市教育委員会
「砂丘」～「景能館跡」
③『茅ヶ崎市史研究』　茅ヶ崎市
十一巻　「鶴田栄太郎氏年譜および著作目録」和田久徳
十二巻　「茅ヶ崎郷土史研究の回顧」　鶴田栄太郎
④『郷土ちがさき』第四四号から十九回連載
「茅ヶ崎郷土史の研究者達」のち「郷土会前史」川添隆行
⑤『郷土ちがさき百号の歩み』　茅ヶ崎郷土会
「鶴田栄太郎さんのこと」　斎藤恭太郎
「頌徳碑に偲ぶ鶴田栄太郎さん」　塩原富男
「碑（いしぶみ）に見る郷土会のあしあと」塩原富男
⑥『茅ヶ崎ゆかりの人物誌』一樹会　茅ヶ崎市教育委員会

第六十二回大岡越前祭　市制施行七十周年記念パレード

羽切信夫

第六十二回大岡越前祭は四月二十二日、二十三日の二日間開催されました。今年は市制七十周年記念パレードも併せて開催され、越前行列・神輿巡行など総勢二千人余りによるパレードが行われました。

大岡越前守忠相公に、没後百六十一年にあたる大正元年（一九一二）十一月に従四位の官位が贈られました。この月の二十二日には、忠相の子孫にあたる東京の大岡家忠綱子爵が、菩提寺の浄見寺を訪れて墓前に贈位の報告を行いました。小出村では、村長・小学校長・檀家総代をはじめ小学校児童や有志が出迎えたと伝えられています。

このことが報道されると浄見寺への参詣人が増えました。この機会に浄見寺住職・茅ヶ崎町長・茅ヶ崎駅長など地元の有志が相談して、記念の式典として大正二年（一九一三）三月九日に「贈位祭」が浄見寺で挙行されました。翌年の大正三年二月十五日に「大岡越前守大祭」と名前を変えて挙行されました。その後も毎年三月に、大岡祭が浄見寺において開かれ、大正十二年（一九二三）の第十一回まで継続しましたが、同年九月一日の関東大震災で、浄見寺の本堂が大きな被害を受けたために、翌年から大岡祭は一旦中止になりました。

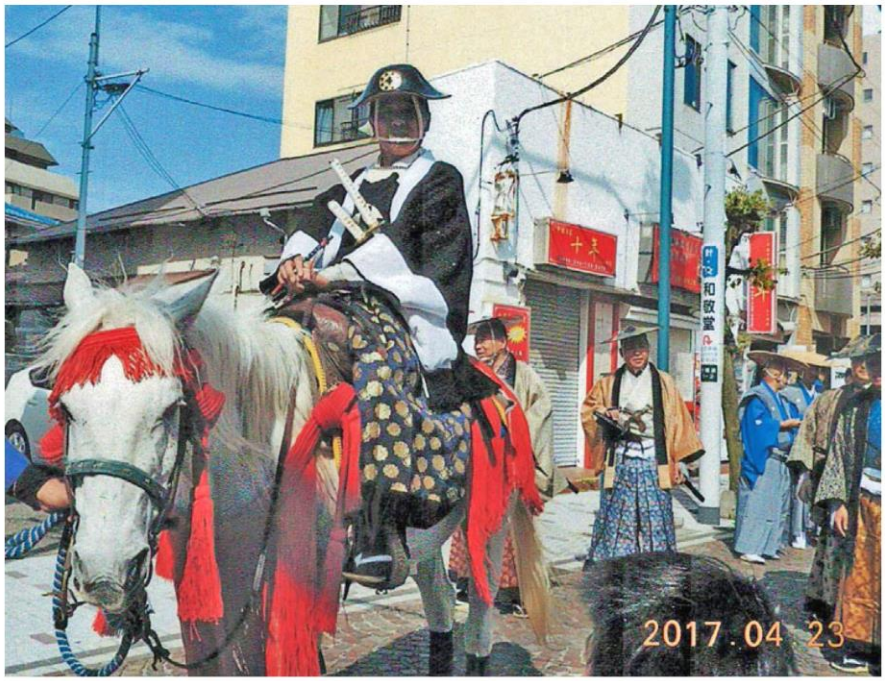
昭和五年（一九三〇）十月には、浄見寺本堂が再建され、遷仏の式が挙行されました。翌六年四月には、復興第一回「大岡祭」が復活し、昭和十二年四月まで続きました。しかし、日中戦争が始まったため、昭和十三年（一九三八）から大岡祭は中止されました。

太平洋戦争が終わった二年後の昭和二十二年（一九四七）には浄見寺で大岡祭が開かれ、同二十四年には「甘藷祭」として開催されました。

現在のような、茅ヶ崎市の市民全体を巻き込んだ「第一回大岡祭」は昭和三十一年（一九五六）四月に始まりました。この復活を計画したのは、茅ヶ崎郷土会鶴田栄太郎、林屋百貨店山本銀三、戸塚茅ヶ崎商工会会頭の三人でした。初日には浄見寺で墓前祭を行い、茅ヶ崎駅前に大岡越前守の位牌を安置し、茅ヶ崎市長が大岡越前守忠相公に扮して、馬上姿で登場し、大名行列をメインの行事として盛大に行われたと伝えられています。行列は総勢百人余りによるパレードで、江戸時代の大名行列をイメージしていました。

今年の大名行列は市制七十年を記念して特別なものでした。四月二十三日の午後一時三十分、茅ヶ崎小学校を出発し、ＪＲ東海道本線茅ヶ崎駅南口―ツインウェイブ―駅北口を通り、エメロード茅ヶ崎に午後三時ころ到着して終了しました。行列の先頭は、顔を白く塗った奴頭（やっこがしら）と毛槍（けやり）を持った毛槍奴の奴隊（やっこたい）がつとめました。奴は、江戸時代に武士が出かける際に、荷物持ちや雑用をこなす役割を担っていました。この奴役には茅ヶ崎青年会議所の方々が扮して祭を盛り上げていました。続いて、市民から公募した与力（よりき：諸奉行などの支配下でそれを補佐する者）、同心（下級役人）などがあるきました。

主役の越前守忠相公が白馬に乗って登場しました。この役は、四十年前までは茅ヶ崎市長が担当していましたが、当時、市議会で「市長が越前守役で、市議会議員が家老職を務めるのは問題だ。市議会議員は市長の部下ではない。お祭りとはいえ問題だ」との意見が出て、現在は原則として、茅ヶ崎市長、茅ヶ崎市議会議長、茅ヶ崎商工会議所会頭が毎年交代で務めています。例外は、平成九年（一九九七）に市制五十周年を記念して一般市民から公募したことでした。今年は、青木浩茅ヶ崎市議会議長が担当しました。



平成29年大岡越前祭の忠相公

女性が越前守役を務めたのは平成十七年（二〇〇五）の第五十回でした。当時市議会議長だった山下孝子さんが務めましたが、長い歴史をもつ大岡越前祭で唯一のことです。

市制七十周年を祝った今年の大岡越前祭は、茅ヶ崎市議会議員、茅ヶ崎商工会議所職員、茅ヶ崎青年会議所職員、茅ヶ崎商工会議所女性会、文教大学演劇部学生、電源開発社員、みずほ銀行行員、Ｊコム社員、国際交流協会会員、茅ヶ崎市役所職員、市民など多彩な人々が参加しました。行列の構成は次のとおりでした。

奴頭（一人：茅ヶ崎青年会議所）―毛槍奴（一四人：同）―与力（一人：市民）―榊原伊織（ドラマ内の医師　一人：市民）―納戸役（一人：商工会議所議員）―同心（一人：市民）―岡っ引き（一人：商工会議所議員）―スーパー岡っ引き（一人：ゲスト）―町娘（二人：ゲスト　茅ヶ崎市役所職員）―越前守忠相（一人：市議会議長　青木浩氏）―口取り（茅ヶ崎商工会議所）―重臣（四人：市議会議員）―とも侍（六人：Ｊコム湘南）―侍の皆さん①（二四人：市議会議員九人・文教大学演劇部一人・国際交流協会一四人）―腰元（五人：市議会議員二人・市民三人）―姫（一人：文教大学演劇部）―裏方（商工会議所女性会）―侍の皆さん②（一八人：電源開発四人・みずほ銀行五人・市民九人）―花見踊りの皆さん（二六人：市民一一人・みずほ銀行五人・文教大学演劇部五人・国際交流協会五人）

参加された皆さん、お疲れ様でした。

（注）

・写真は、会員の前田照勝さんから提供を受けました。

・大岡越前行列で過去の大岡越前守役をつとめた方々に関する資料と、第六十二回大岡越前祭の行列編成資料は、茅ヶ崎商工会議所から提供を受けました。ともにお礼を申し上げます。

社殿彫刻報告（その7）

神武天皇の瞻望（せんぼう＝国見）

―十間坂　第六天神社―

平野文明

一

十間坂、国道一号に沿って第六天神社があります。社殿は国道から一段高い境内に南を向いています。

社殿の向拝の彫刻がすばらしい。中央の像は、えびらに入れた矢の束を背負い、腰に太刀を佩き、右手はかざして遠望し、左手は背中から回る弓の弭（ゆはず＝弓の両端の弦をかける部分）を持つ、武装する男性の立ち姿です。その向かって右には矛（ほこ）を立て、座して控える一人の武人、左には弓を持つ武人二人。そしてこの四人を松樹が囲む。松の葉は丸く独特の形に仕上げてあります。枝先の骨化した老樹の雰囲気です。

弓を持つ二人はやや小さく配置されて遠近感が強調されています。全体が台形にまとめられた構図はとても安定しています。また、四人の表情がいいのです。立ち姿の像は威厳があり、脇に控える武人は温厚な感じに、奥の二人はいささか若い兵士の雰囲気です。また、着衣の表現も丁寧です。裾が風になびく様や両腕と両足首を縛ってそのゆったりとした感じが写実的です。

向拝の屋根は唐破風になっており、そこに羽根を広げて舞い降りる一羽の鳥がいます。この所にある彫刻は、多くの場合鳳凰か龍ですが、ここに飛ぶ鳥は鳳凰ではない。

さて、第六天神社のこれらの彫刻は何を表しているのでしょうか。これが今回のテーマです。

二

向拝彫刻にはときに作者の名前が彫ってあることがあります。作者銘は彫刻の裏にあることが多いようです。

しかし、当神社の彫刻にはそれがない。このすばらしい作品に銘がないということはたいへん残念なことです。

何とかして作者を判明させたいものとあくせくしているときに、これによく似た彫刻が別にあったことに思い至りました。それは、平成二二年九月三〇日付け茅ヶ崎市文化資料館発行の『石仏調査ニュース―ちがさきの石仏』第一四号に「本村八王子神社の彫刻―剣を持つ男の正体」として取り上げた、茅ヶ崎

神武天皇の瞻望（国見）―第六天神社

市本村にある八王子神社向拝のスサノオのオロチ退治の彫刻です。

両神社の彫刻の似ているところをあげると、まずその構図で、場面を松樹が台形に区画しています。次に人物像の表し方。体長に対して顔の割合が大きいこと（下から見上げることを計算に入れての処置です。普通に見ていてはこのことに気づきません。距離をとって望遠で撮影すると分かります。）次に第六天社の立ち姿の男性と八王子社のスサノオの着衣がそっくりなこと、最後に両彫刻にある松の葉と枝の表し方もそっくりなのです。どう見ても両彫刻の作者は同一人物としか思えません。

ネット上の社殿彫刻をあちこち見ている中で、本村の八王子社の彫刻には銘があるという情報に行き当たりました。現地で何度もためつすがめつしたにも係わ

スサノオのオロチ退治―本村の八王子神社

らず発見できなかったものです。今年三月、早速飛んでいってやっと確認できました。彫刻の裏に「昭和丁卯作／佐藤光重」とありました。（丁卯＝二年）

その後、鈴木光雄著『半原宮大工矢内匠家　匠歴譜』（二〇〇九年刊）という本に出会いました。これは愛川町半原の宮大工矢内家が代々手がけた寺社建築を紹介したもので、茅ヶ崎市内の事例も収録されており、この書物を知らずして社殿彫刻を云々していた自分は、泳ぎを知らずして太平洋に飛び込んだようなものだったと知らしめられた本でした。

同書一九二頁、本村八王子神社の項を略して写しますと「昭和二年四月、本殿・社殿、矢内稲雄再興、彫刻は八王子住の彫刻師佐藤光重（一八八八～一九七四）。光重は大正から昭和にかけて八王子近郷の山車彫刻を基に院展にも出品している。その彫歴は各所で貢献し、矢内匠家にも関わった偉大な彫刻師である」と著者の言です。

また一九三頁、第六天神社の項には「昭和二年六月拝殿再建。拝殿設計仕様書の末尾に〈宮大工矢内稲雄　愛甲郡愛川町半原彫刻師佐藤光重所在地同〉とあり、同年六月七日に行われた上棟式の画像が掲載されています。

さらに佐藤光重について、一一頁に「光重は茨城相馬の出で、主に屋台の彫刻で八王子を拠点に活躍した著名な彫師であった」と記されています。

佐藤光重については今後も追求してみたいと思っています。

三

さて、彫刻の絵柄の絵解きに取りかかりましょう。このことは先に紹介した鈴木著『匠歴譜』にも触れてありません。

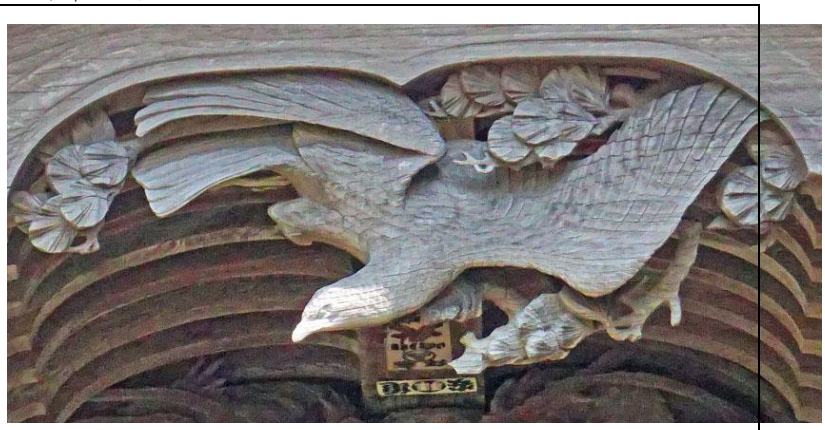
問題は、中央に手をかざして望遠しながら立つ人物は誰かということと、向拝唐破風にある舞い降りる形の鳥は何か、です。

結論から先に申しましょう。

人物はカムヤマトイワレビコ（後の神武天皇）、鳥は頭八咫烏（ヤタノカラス　日本書紀の書き方。古事記は「八咫烏」と書く）だと思うのです。そのわけは…。

［注　日本書紀は岩波書店刊日本古典文学大系新装版『日本書紀』上、古事記は同大系『古事記・祝詞』から引用しました］

神武天皇の軍隊は日向を発ち、瀬戸内海を渡って河内に上陸し大和入りを目指しました。しかしそこにナガスネヒコが立ちはだかっていて戦となり、天皇の兄イツセノミコトが負傷する。日の神の子孫でありながら、東に向かって進軍するからで、東方から、背に日の神のいきおいを受けて進むべきと天皇は悟り、途中でイツセを失いながらも、船で紀伊半島の東側に回り、熊野に至りました。しかし、熊野にも荒ぶる神が居り、地勢は険しく進む道はない。それを『日本書紀』は次の様に記します。



舞い降りるヤタノカラス―第六天神社

しかるに山の中、険絶（さが）しくして、また行くべき路無し。すなわちしじまいて（さまよって）その踏みゆかむ所をしらず。時に夜夢みらく、天照大神、天皇におしえまつりて曰（のたま）わく、「朕（あれ）今、頭八咫烏（ヤタノカラス）を遣わす。以て郷導者（くにのみちびき）としたまえ」とのたまう。はたして、頭八咫烏ありて、おおぞらより翔び降る。（『日本書紀』一九六頁）

苦戦する神武天皇を助けるために、天照大神が天皇の夢にあらわれて、ヤタノカラスを案内者として使わすと告げたのです。

同じこの場面を『古事記』が記すところは、託宣の主を高木大神（タカギムスヒの神）としています。

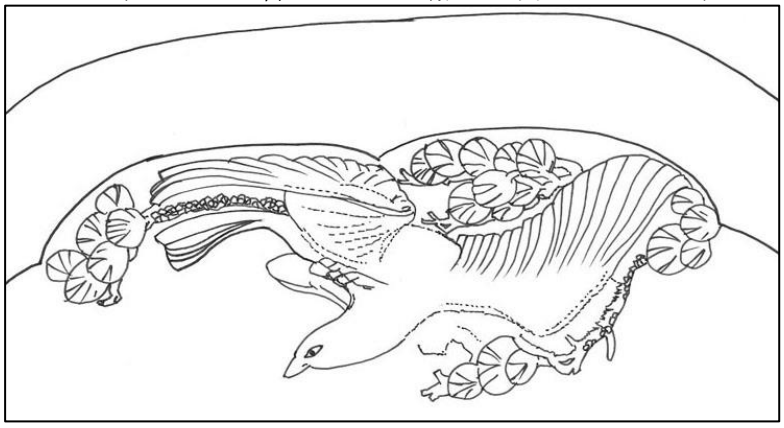
高来大神（タカギノカミ＝タカミムスヒの神）の命もちて（みこともちて＝託宣して）さとし申しけらく、

「天つ神の御子をこれより奥つ方にな入りいでまさしめそ。荒ぶる神いと多なり。今、天（あめ）より八咫烏を遣わさむ。故（かれ）、その八咫烏みちびきてむ。その立たむ後よりいでますべし。」（『古事記』一五三頁）

案内のために高天原から使わされたヤタノカラスの後について進めという託宣でした。

天皇の軍隊は山を踏み開きながら菟田（うだ　現在の奈良県宇陀市）に到着します。ここでエウカシを討ち、吉野に回ってイヒカ、イワオシワクの異形の人などに遇い、菟田に戻って天皇は高倉山の頂きと、国見丘（くにみのおか）から瞻望（せんぼう）します。このことを神武天皇の国見ともいいます。その様子を『日本書紀』は次の様に記します。

九月の甲子の朔、戊辰（五日）に、天皇、彼の菟田の高倉山（三重県宇陀市）の嶺に登りて、域（くに）のうちを瞻望（おせ）たまう。時に、国見丘の上にすなわち八十梟帥（やそたける＝たくさんの荒ぶる神）有り。また（天皇は）女坂（めさか）に女軍（めのいくさ）を置き、男坂に男軍（おのいくさ）を置く。墨坂に熾し炭（おこしずみ＝燃えさかっている炭）を置けり。其の女坂・男坂・墨坂の号（な）は、此に由りて起これり。また、兄磯城（エシキ）の軍有りて磐余邑（いわれのむら）に布き、満（いわ）めり。賊虜（あた＝敵対する神々）のおる所は皆是要害の地なり。故、道路絶え塞（ふさ）がりて、通らむに所な



し。天皇悪（にく）みたまう。この夜、自ら祈（うけ）いて寝ませり。夢に天神（あまつかみ）有（ま）しておしえまつりて曰わく

「天香山の社の中の土をとりて天平瓮（あまのひらか）八十枚を造り、あわせて厳瓮（いつへ＝神酒を入れる徳利）を造りて、天神（あまつやしろ）、地祇（くにつやしろ）を敬い祭れ…」（一九八頁～）

天皇、国見をすれば至る所に荒ぶる神々が陣を張って待ち構えている。そこで、天つ神の教えどおりに天神地祇を祭り、聖なる武器を造り、国見の丘に八十梟帥の一つを討ち、次にエシキ、オトシキの兄弟の征伐に向かった。天皇は、兄弟を呼び出すために使者を送ったが返答がない。そこで重ねてヤタノカラスを遣わし、伺候するように促せば、兄のエシキは「うるさい」と矢を放つ。カラスは次に弟のオトシキのところに行けば、招きを待っていたと歓待し、天皇の元に駆けつけます。天皇は、自軍の女軍（めのいくさ）と男軍（おのいくさ）を使ってエシキを切りました。（『日本書紀』二〇四～六頁）。

記紀では、先にヤタノカラスの道案内の場面があり、国見はその後となっていますが、彫刻の、望遠する武装の男性から取り上げますと、これはまず神武天皇とみて間違いないでしょう。武装はしていますが、戦いの場面ではない。両脇に控える三人の武人も座っており、戦ってはいない。高倉山あるいは国見の丘の頂から、今から進む大和の方向をながめ、敵軍が満ち満ちしていることを知る天皇の姿です。

だとすると、鳥はヤタノカラスだと思います。道なき道を案内せよとの命を受けて、高天原（たかまのはら）から遣わされたのです。彫刻の、頭を下にして飛び降りる様子は、『紀』の「おおぞらより翔び降る」という表現にぴったりです。

ただ、ヤタノカラスと断定するにまったく問題が無いわけではありません。それは『日本書紀』に、金の鵄（とび）が天皇の軍隊を助けるために飛び来たった話が次の様にあるからです。

いよいよ主敵ナガスネヒコとの一戦となった。時は十有二月（師走）癸巳の朔、丙申の日、しかし戦は長引き決着が付かない。

しきりに戦いて取勝つことあたわず。時にたちまちにして天陰（ひし）けて氷雨ふる。すなわち黄金のあやしき鵄（トビ）有りて、飛び来たりて皇弓（みゆみ）の弭（ゆはず）にとまれり。その鵄照りかがやきて、かたち流電（いなびかり）のごとし。これによりて長髄彦（ナガスネヒコ）が戦の人ども、皆まどい眩（まぎ）えて、また力（きわ）め戦わず。（『日本書紀』二〇七～八頁）

彫刻の鳥はカラスではなくトビだという考えも成り立ちます。神武天皇が持つ弓のゆはずの先に金色のトビが止まっている絵柄は、かつてはどこででも見ることのできた絵柄でした。もし彫刻師鈴木光重氏が金鵄として表現するのなら、人口に膾炙したこの絵柄を用いたのではないでしょうか。ダメ押しを一つ。唐破風にある鳥の彫刻には首があります。飛行中の実際のトビは首がすごく短く、広げた羽の中央にちょこっと三角形の頭が見えるだけです。鈴木光重氏はカラスとトビの違いを的確に表現しているものと考えます。

一軍はこのように高天原の神々の助けを受けながら次第に大和に近づいて行きました。

茅ヶ崎郷土会　史跡めぐり報告

（平成二十九年八月六日）

二八〇回　史跡めぐり

北鎌倉の五山文化

山本俊雄

平成二九年五月二二日（月）　参加者　一五名

今年度の史跡めぐり「鎌倉と小田原」の第一回目です。

当日は天候も良く距離も短く楽な史跡めぐりと思えました。コースは、北鎌倉駅から円覚寺、浄智寺、建長寺、寿福寺と鎌倉五山のうちの四つの禅宗寺院を巡って鎌倉駅で解散するというものでした。

先ず、北鎌倉駅横の円覚寺前で、源さんが中国からの五山制度の由来、鎌倉・京都の五山、その文化について説明されました。私がつい口をすべらせ、線路の向うの池、百鷺池（びゃくろち）の向こうに見える石垣までが元々の境内で、明治政府により横須賀の海軍鎮守府まで鉄道を通す必要から分断された、と言ってしまった。すると平野会長から「向こうにも門があったんですか」とたずねられ、一瞬忘れていたのですが、「エエ、ありました。」とあやふやに言ってしまい、まずい、また宿題を抱えてしまった。

それで帰ってから調べてみますと、円覚寺の古地図では、池を囲む様に築地塀（？）、その凹型の外側に馬道（鎌倉みち）があり凹型の左右の先端を南北に今の鎌倉みちが通っていました。つまり見えていた石垣のさらに向こうに馬道があったという事です。門は凹型の側面左右下部に南門北門と二つあります。前説が長くなりました。先に進みます。

円覚寺は鎌倉五山第二位、円覚寺派総本山、開基は八代執権北条時宗、開山が無学祖元（仏

円覚寺の三門（山門）

光国師）文永、弘安の役(元寇)で戦死した両軍兵士の菩提を弔う為に建立されたとのことです。

総門から入る時に片田さんに、五月連休中の下見の時に見た「漱石」と彫られた手水石はどこか？と聞かれ、またまたうろ覚えに建長寺だったのでは、などと話していますと、山門をくぐり仏殿に向かうと、なんと右側にその手水石が見えます。半月前のことを忘れていたとは残念です。

円覚寺は塔頭も多く全てを見学するのは時間的にも難しいのですが、それでも桂昌庵（十王堂、徳川五代将軍綱吉生母、桂昌院ゆかり）から選仏場、柳生道場を移した居士林（在家修行者のための専門道場）を観て、**仏殿**に入り本尊宝冠釈迦如来像を拝観しました。天井絵は日本画家の前田青邨監修、守屋多々志揮毫の白龍の図です。仏殿は関東大震災で倒壊したため、元亀四年（一五七三年）の「仏殿指図」を基に昭和三九年鉄筋コンクリート造で再建されました。ちなみに休館前の県歴史博物館には「仏殿指図」に基づいた一／一〇縮尺の木造模型が展示されていました。（県博は現在休館中で来年四月末頃再開予定です）

仏殿から方丈の横を、妙香池を左手に見て奥に進み、仏日庵の手前を左に折れると正続院で、奥に鎌倉で唯一の国宝建築物にして日本最古の唐様建築物**「舎利殿」**が見えます。

下見のときは中門の中まで入られたのですが、この日は外門の外からしか見られないので、昔中学生の頃教科書で見た建物が遠くに見られるだけです。この舎利殿も横浜の県博では、内部を原寸大にした実物模型を展示しています。花頭窓や弓欄間、粽柱に裳階と屋根の垂木の違い（平行と扇形）などがよく分かります。

戻って左手**仏日庵**（開基北条時宗の廟所で、九代貞時〈時宗の子〉、一四代高時〈時宗の孫〉も合葬されている）では高時命日の赤字の札がでていました。片田さんが宝戒寺で北条氏の供養があるので見たいと話されていたのですが、この日五月二二日は東勝寺で北条一門が滅亡した日でもあり、宝戒寺では「得宗権現会」が行われていたのですが、廻る予定がなく下調べもしていなかったので式の予定時間が分かりませんでした。

仏日庵は門外から中の様子を見て、そのまま最奥の**黄梅院**に。そこは五山文学の最盛期を作った夢窓派の師、夢窓疎石の塔所で、足利二代将軍義詮も分骨され菩提寺となっています。

その後、鎌倉三名鐘の一つ国宝洪鐘（おおがね）を見るために，急で高い石段を登りました。数えると百段余り、数は忘れていましたが、苦しい記憶のみ残っています。上には貞時が洪鐘を造るときに世話になったという江の島の弁天様を祀った弁天堂も一緒にあります。堂の右側に茶屋と富士山の見える見晴らし所があります。

次に鎌倉街道を南に進むと、踏切手前右側に五山第四位の**浄智寺**が見えます。総門の前には鎌倉十井の一つ「甘露ノ井」があり、開基が北条宗政とその子師時（後の十代執権）となっています。五代執権時頼の三男宗政が二九歳で若死にしたため夫人が一族の支援により夫と遺児師時名で開基としたと伝わります。

開山は、南洲宏海が自分には大任過ぎるといって、師の大休正念とそのまた師の渡来僧兀庵普寧（ごったんふねい）を開山としたため、三人となっています。二階に唐様の鐘楼がある鐘楼門を入ると仏殿（曇華殿）に出る。本尊として木造三世仏座像の阿弥陀、釈迦、弥勒如来を安置してあります。それぞれ過去、現在、未来を表す仏です。鎌倉に多い衣の裾を台座の下まで長く垂らした「法衣垂下様式」で室町時代の作と言われています。奥のやぐらの一つに「布袋尊像」があり鎌倉七福神の一つです。

踏切を越えて巨福呂坂に向かうと鎌倉五山第一位の**建長寺**に着きます。ここの法堂裏で先ず昼食を取りそれからの見学となりました。

開基は北条時頼、開山には蘭渓道隆（大覚禅師）を中国（宋）から迎えました。我が国最初の禅寺です。伽藍は宋の禅宗寺院を模したもので、総門、三門（山門）、仏殿、法堂、方丈など主な建物が直線上に並ぶものでしたが、地震や火災で倒壊焼失、再建を繰り返しました。現在もほぼ直線をなし、禅宗式を残しています。三門、仏殿、法堂、唐門は国重文、梵鐘は国宝。けんちん汁は「建長汁」からと言われています。**仏殿**には本尊地蔵菩薩座像、宋風様式の法衣垂下像です。**法堂**の天井には小泉淳作の雲龍図があり、釈迦苦行像もあります。苦行像は、源さんに促され「万博終了後にタイから寄贈された」と話したところ、傍らより「パキスタンと書いてあるよ」と言われ、またまた不確かな知識を披露してしまいました。

この後は二十五坊方面でなく亀ヶ谷切通しから**寿福寺**と五月一五日に開館したばかりの**鎌倉歴史文化交流館**を巡ることになりました。

建長寺の三門（山門）

寿福寺は五山第三位北条政子開基、「喫茶養生記」の栄西を開山に招いています。元々義朝の屋敷跡と言われ、裏のやぐらには政子と実朝の墓と伝わる五輪塔もあります。また、高浜虚子や大佛次郎の墓もあります。

続いて、歴史文化交流館をじっくり観賞し、一五時頃鎌倉駅で解散した。楽な史跡めぐりのはずでしたが一万五千歩以上は歩いたようでした。

第二八一回　史跡めぐり

小田原城とその周辺

平成二九年六月二六日（月）　参加者一九名　源　邦章

今年度の史跡めぐりは鎌倉市内四回、小田原市とその周辺を三回予定しています。今回はその小田原市とその周辺の第一回として、小田原城が第一の目的でした。小田原城天守閣は昨年耐震補強工事をすると共に展示を大規模リニューアルしました。どのように変わったか楽しみです。

いつものように茅ヶ崎駅に集合し、ＪＲ東海道本線で小田原駅へ行き新幹線口を出た広場に**①北条早雲公像**が建っています。そこから徒歩一〇分で**②北条氏政・氏照の墓所**に着きました。次いでお堀端通りを進むと**③幸田口門跡**があり、そこは江戸時代築造の「三の丸土塁」が小田原郵便局の裏側まで続いていました。そこからはいよいよ小田原城址公園に入りました。**④歴史見聞館**、**⑤常盤木門・巨松**（おおまつ）、**⑥小田原城天守閣**を経て**⑦土産物館外郎**（ういろう）、**⑧小田原宿なりわい交流館**で本日の史跡めぐりは終了しました。その後全員で「だるま料理店本店」で舌鼓を打ち解散、それぞれに茅ヶ崎へ帰りました。

今回の史跡めぐりの目玉は小田原城でありますので、その歴史を簡単に述べておきます。小田原城が初めて築かれたのは、大森氏が小田原地方に進出した一五世紀中ごろのことと考えられています。一五〇〇年頃に戦国大名小田原北条氏の居城となってからは、関東支配の中心拠点として次第に拡張整備され、豊臣秀吉の来攻に備えて城下を囲む総構を構築しました。これで城の規模は最大に達し、日本最大級の中世城郭に発展しました。

江戸時代を迎えると、小田原城は時の領主達によって改修が進められ、近世の城郭として生まれ変わり、箱根を控えて関東地方防御の要衝として、また幕藩体制を支える譜代大名の居城として幕末まで重要な役割を担ってきました。

明治三年に小田原城は廃城になりほとんどの建物は解体され、残っていた石垣も大正一二年の関東大震災によりことごとく崩れ落ちてしまいました。現在の小田原城跡は本丸・二の丸の大部分と総構の一部が国の史跡に指定されており、「日本一〇〇名城」「日本の歴史公園一〇〇選」にも選ばれております。

天守閣は、江戸時代に造られた雛型や引き図を基に昭和三五年（一九六〇）に鉄筋コンクリート造りで復興されたものですが、昨年耐震補強工事を完成させ、内部の展示も五階層になっており、常設展示・企画展等で、古文書・絵画・武具・刀剣などの歴史資料の展示室になっています。

小田原北条氏の経歴・事績については既にご承知の事と思います。そして次回の「阿弥陀寺」めぐりの時、早雲寺にも寄りたいと思いますので、今回は言及しません。

そこで、今回是非知って頂きたい事があります。小田原城が初めて築かれたのは大森氏と前述しました。この大森氏について調べてみました。大森氏は駿河郡の古い土豪であり、台頭するのは大森頼春の代からだそうです。鎌倉公方に仕え「上杉禅秀の乱」の鎮圧に功績を挙げ、禅秀方であった土肥氏を滅ぼしその勢力圏の相模・伊豆に勢力を拡げました。「永享の乱」の後、国人として勢力を保ち「享徳の乱」以後の混乱期に憲頼・成頼と氏頼・実頼の系統に分かれ対立しましたが、氏頼系が勝利し扇谷上杉家の重臣となり、小田原城を中心に勢力を拡げ繁栄しました。その後大森氏は藤頼の代に北条早雲に小田原城を落とされ没落しました。しかし一族の末裔が小田原北条氏に仕えた後、徳川氏に仕え幕府の旗本として存続していきました。

大森頼春――氏頼――実頼
――憲頼―成頼――藤頼

この大森一族は歴代、仏教に対する関心が高く、氏頼（法号寄栖庵明照）は数々の寺々を建立しています。その最大の寺が道了山最乗寺です。今でも四千の末寺を抱え宗門最大の勢力を示して、大森氏の絶頂期を築いております。頼春の弟には箱根権現の別当の証実（澄実）がおり、さらにその弟には安叟宗楞（あんそうそうりょう）がおります。彼は小田原久野総世寺・早川海蔵寺・箱根阿弥陀寺等を建立しています。

会員投稿

神輿道

中島幸子

“ワッショイ、ワッショイ、ソイヤ、ソイヤー”

梅雨が明けきらない霧雨の降る中を神輿の行列がやってきた。郷土の鎮守様八王子神社の例大祭に、神輿が菱沼の海岸まで練り歩くという。五十年このかた神輿を担ぐ行事は、ストップしていた。

神輿は百年前に造られたので、新しくして今年は三十周年を祝うことにするという。そこでいきなり「ソイヤー」の掛け声である。“ああ、祭りはいいなあ”

お囃子連中を乗せた屋根付きの車がやってきた。太鼓三人、笛二人、上手に奏でながら、にこやかな顔をしている。長老が笹の間に御幣をなびかせながら、そろりそろり通ると、その後ろから、カッカカッカと金輪を叩く音、甲高いお囃子のリズムにのって神輿が上下に揺れながら通っていった。

氏子は、五十年ぶりの神輿との対面に拍手しながら体を乗り出している。祭りには血をたぎらせる力がある。わくわくしている若者のせなかには郷土名を染め抜いたはっぴがよく似合う。若者に、

「わたしは、五十年前の古い御神輿を知っているのよ」

「へー、そう」古くさい話をしてらあと私の顔をしみじみ見つめている。

「知っているかしら、この道通らなくなったけれど、海まで貫いていて『神輿道』という名前なのよ」

「えー、こんな道にも名前ついてんだ、知らなかったなあ」

「そうよ、昔は由緒ある道だったってわけなのよ」

「へー」　もう一度大きくうなづいた。

若者たちの茶色のはっぴ、白足袋はだしというカッコよさがわかっているのだろうか。否応なく着せられたにせよ、昔の話に「へー」と相づちを打ってくれたことがうれしかった。

祭りの夜、鎮守様が縁結びになったとか。お囃子の練習で意気投合したとか、祭りは大切な社交場でもあったのだ。最近では、ふれあいの場面をコミュニケーションとかネットワークとか言うようになった。

今日だけは、『神輿道』を、ソイヤ、ソイヤと通って行った。

茅ヶ崎郷土会　今年度の事業報告

第六十二回大岡越前祭

墓前祭に出席して

杉山　全

平成二十九年四月二十二日（土）午後三時より、大岡家の菩提寺である浄見寺（茅ヶ崎市堤四三一七）本堂において、大岡越前守忠相公の墓前祭が厳かに挙行された。

大岡奉賛会や地元関係者の多数の参会者のなか、浄見寺ご住職の先達のもと、十数名の僧侶臨席による読経で荘厳な法要が行われた。

それに続き、江戸消防記念会の方々により木遣りが奉納された。

その後、参会者全員が焼香し、大岡奉賛会会長の服部信明氏、大岡越前祭実行委員会長の亀井信幸氏などの挨拶があった。それに応えて、大岡家第十四代当主忠輔氏の代理としてご子息のお話があり、本堂での墓前祭は終了した。

参会者はそれぞれに墓前にお詣りをし、散会となった。

浄見寺本堂での法要

大岡越前守遺跡写真展

坂井源一

今年は市制施行七〇周年事業と併せての大岡越前祭となり、郷土会は恒例の「大岡越前守遺跡写真展」としての参加となりました。会場は総合体育館内で四月二二日（土）～二三日（日）、そして「大岡越前浄見寺地元まつり」では二二日に旧和田家土間でパネル展示を実施しました。

遺跡写真の主体は例年通りの内容でありましたが、キャプションを新規に作成し、総合体育館では観光協会より借用の大判「観光ポスター」五年分を追加し、展示説明に厚みのある内容とすることができました。あわせて、来場者には尾坂会員他の丁寧な説明が大変好評でした。

両会場ともに例年の写真展示であるにも関わらず、多くの来場者をお迎えする事ができ混雑する時間帯もありました。

総合体育館では二三日には服部市長のご来臨をいただきました。

来年の越前祭参加には、会員相互の勉強会を実施し、新たな内容の企画準備をスタートします。

浄見寺の大岡家一族墓地

茅ヶ崎二十三ケ村調査勉強会　進行中

江戸時代、茅ヶ崎市内には二十三の村がありました。時は流れ茅ヶ崎は大きく変わりましたが、村の意識は今も各地に生きています。そこで、一村ごとに歴史、民俗、史跡、文化財などを調査し記録しようという事業に今年度から取り組みました。名づけて「茅ヶ崎二十三ヶ村調査勉強会」。茅ヶ崎郷土会の会員は市内各地に九十人近く居ますのでその強みを地元とのお付き合いに生かしたいという思いもあります。会員外の賛同者も加えて、この活動に二十名近い方々が取り組んでいます。

郷土会の会則第三条は会のトップ事業を次の様に規定しています。「本会は、前条（注　第二条）の目的を達するため、以下の事業を行なう。一、郷土に関する歴史の調査及び探求。（以下省略）」

「中島村」から着手し、月に二回ずつの準備を踏まえ、七月には地元の絶大な協力を得て聞き取り調査を行い、たくさんの成果を得ました。年に二つの村を済ませたとしても十年以上かかる計算です。調査結果は、とりあえず来年度以降の文化祭に取り上げる予定ですが、いったいどこまで続けられるのか、せっかくの成果物をもっと有効に活用できないものなのかなど、悩みも大きいというのが実情です。まあ、続くところまで続けてみよう、今まで知らなかった事を知ることができれば、それはそれで良いのではないか、とも話し合っている次第です。

一人でも多くの方の参加を望んでいます。　**（平野文明）**

参加の記

「今年は各地域について調べるらしい」と初めに耳にした時は、正直あまりピンと来なかった。私は常勤で、就労のため毎回出られるわけではなく、「どんなふうにやっているのか傍らから見ることができればよいかな」くらいの感じだった。先輩方の検討のもとに作られた資料、地図や小字図、調査項目を見て、「文化人類学の学者みたい」と思った。

七月四日に協力者のお宅を会員二人で訪問する。調査項目をちら見して、話者の表情を見ながら、「ここはもっと伺おうか、別の事に振ろうか」など話の方向を考えながら、一生懸命メモを取る。こちらの事前知識が乏しいので話者に失礼のないようにと思っていたが、新しく知る事柄に驚き、いつの間にか夢中になって聴いている。初対面にも関わらず、昔の人は大変だっただろうなど共感し、話者との距離が縮まるようだ。その結果はメモを基に調査カードに分けて書く。この作業で内容がより鮮明になった。

将来冊子となる時、読み手に私達が話者から聴いた時の気持ちも届くとよいな、と思う。　**（山崎まゆみ）**

茅ヶ崎郷土会　平成二十九年度新役員

今年五月十九日、市立図書館の会議室を借りて、多くのご来賓の出席を頂き、茅ヶ崎郷土会と茅ヶ崎郷土芸能保存協会の総会が行われた。諸般の事情から郷土芸能保存協会の総会が先だったが、両会とも、前年度の事業報告、決算報告、監査報告、今年度の事業計画案、予算案が提案、審議され、決定した。その後役員の改選が行われ、次の様な新役員の顔ぶれが決まった。

【茅ヶ崎郷土会】会長　平野文明、副会長　羽切信夫・源　邦章（史跡巡り）、理事　杉山　全（事務局長）、誉田雅彦（会計）、森　早苗・小川正恭（郷土歴史民俗勉強会）、原　俊一（郷土芸能保存協会会計）、中島幸子（茅ヶ崎かるた）、山本俊雄（史跡巡り）、岡本嗣男（ＨＰ）、監事　坂井源一（郷土歴史民俗勉強会）、尾坂郭子（大岡越前祭）、相談役　名和稔雄・青木昭三

この外に会報「郷土茅ヶ崎」の配布などの協力員に、西　輝幸、佐藤光造、前田照勝、佐藤博之、高橋裕子の各氏。

【茅ヶ崎郷土芸能保存協会　副会長の小沢勝重さんを除き、茅ヶ崎郷土会役員が兼任する役員のみ列記】

会長　青木昭三、副会長　小沢勝重・平野文明、会計　原　俊一（前記）、監事　坂井源一、理事（羽切信夫・源　邦章・杉山　全・誉田雅彦・森　早苗・中島幸子・山本俊雄・小川正恭・尾坂郭子・名和稔雄）

今回の役員改選で最も大きな出来事は青木昭三会長の会長退任である。青木さんは平成二十年から会長として郷土会と郷土芸能保存会を支えて両会の発展に尽くされた。会員一同心からお礼を申し上げます。（編集子）

本誌一三九号（平成二九年五月一日発行）に次の間違いがありました。訂正してお詫び申し上げます。

●2頁下段一四行目「と」トル●4頁上二四行イソラ「を」（追加）●下三行「共」→供●一一行「右方」→左方●二三行「の」トル●二五行「イソラ」→トヨヒメ●5頁下後から二行→侵入事件「に」（追加）●後二行和田太郎「●同」トル●6頁上後三行「二〇〇〇」→一二〇〇●下一四行「に」トル●8頁下後一行→元禄一〇「年」追加●9頁下後から一、三、一一行、10頁上写真キャプション、三、一二、二七行、同頁下二、五、七、一六、一七、一九、二〇、二二行岡「﨑」→崎●10頁下一行「健」保→建保●11頁上三行二七九「回」（追加）●下二二行「健」保→建保●12頁上二行初「音」→声●四行それ「ぞ」れ●一八行「広」長→弘長●下二行終点「て」→で●下一一、一二、一四行「同」寸→道寸、二二行二八「日」（追加）●14頁上後から六、八行、同頁下後から一三、一四行人「口」→工●15頁上後一行「三」トル●兵庫「県」（追加）●下二行岡崎「氏」→市●17頁上一四、一六行孝「道」→通●同頁下「丸ごと一〇一」記事の前に『中島中学校地域交流会に協力「茅ヶ崎かるた●昔のあそび」九月一七日（土）』を追加●裏表紙「史跡　文化財めぐり」11月27日28「4」回→283回●12月25日「火」→月●2月「26日」→日取り未定●欄外下から三行目集合時間8時「30」分→8時50分

なお、ＰＤＦ版は訂正してあります。

【編集後記】

今日は八月二一日。浜降祭が終わり花火大会が済みお盆が過ぎて、茅ヶ崎の夏は終盤戦に入りました。七月は真夏日が続き、月が変わると雨がちの八月。集中豪雨に襲われた方々の難苦に心が痛みます。時は淡々と進み、茅ヶ崎郷土会は文化祭で忙しい九月を迎えます。次号一四一号の発行は来年一月。寄稿を待っています。（編集子）

平成29年度　茅ヶ崎郷土会　年間事業予定

（網掛けは終了した事業）

平成29年8月31日印刷

		理事会 総会	催し物	（公開事業①） 市外史跡・文化財めぐり	（公開事業②） 市内23ヶ村調査勉強会 【会場　福祉会館及び現地】	会場・収容人数	（公開事業③） 郷土歴史民俗勉強会 【会場　福祉会館】	会場・収容人数	郷土ちがさき　発行
平成29年	4月	理事会 10日・月	大岡越前祭「越前守遺跡写真展」 ・総合体育館22日（土）・23日（日） ・民俗資料館旧和田家22日（土）	—	11日（第2火）13:30～　準備会	集会室2（36人）	—	—	—
					25日（第4火）13：30～　準備会	集会室2（36人）	—	—	
	5月	理事会 総会 19日（金）	—	22日（第4月）280回 鎌倉市　北鎌倉の五山文化	2日（第1火）13：30～　室内（中島村-1）	集会室2（36人）	—	—	1日発行 （139号）
					16日（第3火）13：30～　室内（中島村-2）	集会室6（24人）	16日（第3火）10:00～ 平野　市内の神社　伊勢信仰-2	集会室6（24人）	
	6月	理事会 12日（月）	—	26日（第4月）281回 小田原市　小田原城とその周辺	6日（第1火）13：30～　室内（中島村-3）	集会室6（24人）	—	—	—
					20日（第3火）13：30～　室内（中島村-4）	集会室6（24人）	20日（第3火）10：00～ 岡崎　浜降祭のはなし	集会室2（36人）	
	7月	理事会 11日 （火）	—	—	4日（第1火）終日　現地調査（中島村-5）	—	—	—	—
					11日（第2火）13：30～　サポートセンター（中島村-6）				
					18日（第3火）終日　現地調査（中島村-7）	—	—	—	
	8月	理事会 7日（月）	—	—	1日（第1火）13：30～　室内（中島村-8）	集会室6（24人）	—	—	—
					15日（第3火）13：30～　室内（中島村-9）	集会室2（36人）	15日（第3火）10：00～ 源　相模のもののふたち	集会室2（36人）	
	9月	理事会 8日（金）	中島中学校の地域交流会に協力 ・日程未定	25日（第4月）282回 鎌倉市　日蓮の足跡	5日（第1火）13：30～　室内（中島・下寺尾）	集会室2（36人）	—	—	1日発行 （140号）
					19日（第3火）13：30～　室内（中島・下寺尾） 【会場】市民活動サポートセンター	—サポセン—	19日（第3火）10：00～【会場】市役所分庁舎5階B会議室 丸ごとの会　加藤幹雄さん（相模と渡来人）		
	10月	理事会 16日（月）	市民文化祭「相模のもののふ展」 ・2日（月）～6日（金） ・市民ふれあいプラザ（市役所内）	—	~~3日（第1火）終日　現地調査【中止】~~	—	—	—	—
					17日（第3火）終日　現地調査（下寺尾村）	—	—	—	
	11月	理事会 6日（月）	郷土芸能大会 ・23日（木　祝日） ・市総合体育館	27日（第4月）283回 箱根町　阿弥陀寺	7日（第1火）13：30～　室内（△△村-1）	（　　）	—	—	—
					21日（第2火）13：30～　室内（△△村-2）	（　　）	21日（第3火）10：00～ 平野　市内の神社　伊勢信仰-3	（　　）	
	12月	理事会 4日（月）	—	25日（第4月）284回 鎌倉市　廃寺跡巡り	5日（第1火）13：30～　室内（△△村-3）	（　　）	—	—	—
					19日（第3火）13：30～　室内（△△村-4）	（　　）	19日（第3火）10：00～ 坂井　（　未定　）	（　　）	
平成30年	1月	理事会	—	—	9日（第2火）終日　現地調査（△△村-5）	—	—	—	1日発行 （141号）
					16日（第3火）終日　現地調査（△△村-6）	—	—	—	
	2月	理事会	サポセンワイワイまつり ・2月25日（日）	日取り未定　285回 小田原市　曽我の流鏑馬	6日（第1火）13：30～　室内（□□村-1）	（　　）	—	—	—
					20日（第1火）13：30～　室内（□□村-2）	（　　）	20日（第3火）10：00～ 平野　市内の神社　i伊勢信仰-4	（　　）	
	3月	理事会	—	26日（第4月）286回 鎌倉市　太平記を訪ねる	6日（第1火）13：30～　室内（□□村-3）	（　　）	—	—	—
					20日（第3火）13：30～　室内（□□村-4）	（　　）	20日（第3火）10：00～ 原　温泉の話	（　　）	

★実施日・場所・テーマなどは変わることがあります。お問い合わせは平野文明（090－8173－8845）　源邦章（080－6784－3088）　山本俊雄（090－6174－2806）。
★公開事業②　23ヶ村調査勉強会の対象村・期日は変更することがあります。
★「市外史跡・文化財めぐり」　集合は茅ヶ崎駅改札前午前8時50分。雨天のときは一週間後の同じ曜日・時刻に実施します。その日も荒天の場合は中止です。
★（公開事業①③）は、会員200円、会員外は300円ご負担願います。また②も含め必要経費が生じた場合は会員・会員外を問わず臨時徴収することがあります。
★（公開事業③）は、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会との共催です。
★交通費・食事・傷害等は各自対応してください。